

隣人関係における親密さと不安定さ

——北インド・スピティ渓谷におけるチベット系民族の事例から

中屋敷千尋

<要旨>

本論は、北インド・スピティ渓谷において隣人関係がどのように築かれているのかを明らかにすることを目指す。従来のチベット系社会の人々の関係に関する研究は、親族関係に焦点化したものがほとんどだが、実際の人々の生活に目を向けると、近隣住民とも親密な関係を築いていた。ここでいう近隣住民あるいは隣人は、時に友人や仕事仲間でもありうる。スピティでは、地理的な特性や歴史的な経緯が関係しつつ、隣人同士のあいだには労働や贈与交換、そして相互の食事提供といった相互扶助関係が築かれている。日々の生活において互いに手助けしあうだけでなく、頻繁に関わっている。これらの関係は必ずしも形式的にバランスのとれた関係とは限らず、不均衡を含み込んでいる場合もある。隣人同士の頻繁な関わりや扶助関係の不均衡さには、将来直面するかもしれない困難を回避するための投資という側面が関係することは否定できないが、必ずしもそれだけではない。日々関わることを通して、隣人同士のあいだには、互いに日々の感覚に組み込まれるような現象が生じていた。このともにある感覚には筆者自身も含まれるようになり、それによって義務も生じるようになった。日々の生活のみならず、結婚式や死者儀礼といった儀式や儀礼においても、隣人は労働力の提供やモノの贈与、そして感情的な支えを行うことで重要な位置を占めている。また、時には親族を超えるような隣人のふるまいもみられた。しかし、隣人同士の関係は両義的である。親密に付き合いながらも、予期せぬ結果やジレンマが生まれたり、些細なことをきっかけとして関係が疎遠になったりするなど、同化と差異化が繊細になされている。ここからは、隣人研究において議論されてきた道義と戦術の入り組んだあり方のほか、情動的なつながりがみられるとともに、これと関連して、強い紐帯が必ずしも連帯を強めるわけではなく、脆弱性をも含み込んでいることが示される。

1 はじめに

1-1 目的

本論は、北インド・スピティ渓谷に住むチベット系民族を対象に、どのような隣人関係が築かれているのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、隣人と日々の生活のなかでどのように関わっているのか、それらの関係性はそれぞれの場面に応じていかに出現するか、あるいはいかに微細に変容しているのか、これらの関係はスピティにおける柔軟な枠組みをもつ親族ニリン¹とどのように関連するのか、を明らかにする。なお、本論で扱う隣人あるいは近隣住民は、時に友人や仕事仲間でもありうる。

これらの分析を通じて、人類学の隣人研究における道義か戦術かという議論に対し、情動の視点を含める必要があること、それと関連して都市社会学の隣人研究において議論されてきた紐帯の強弱と連帯の関連についての議論に対し、強い紐帯の脆弱性の存在を指摘する。

なお、本論では、北インド・チベット系民族を、ラダック、ザンスカール、ラホール・スピティなどの地域に10世紀以前から居住しているチベット仏教徒の人々を指すこととする。

人類学における隣人研究は、加速する都市化やますます増加する人々の移動に伴い、従来の地域共同体や親族研究の枠組みだけでは理解できない多様な関係性が出現するなかで、隣人の位置づけを見直す必要に迫られている。従来の研究においては、隣人よりも親族が注目されるか、あるいは隣人に関する研究においては、隣人は地域の規範を遵守すべき存在であり、規範に逸脱した際には社会的制裁を受ける存在としてみなされてきた。しかし上記のように多様な関係性が見直されるなかで、隣人は共同体論やネットワーク論、あるいはエスニシティ研究の文脈で以前と異なる位置づけがなされ、注目を浴びつつある。

他方、人類学の親族研究においても、近年増加する移民や、生殖医療の進展とそれに伴う法の整備などの影響による家族や親族のあり方の変化という現象を受け、大きな転換点を迎えている。これまでの親族研究は、血縁関係や姻戚関係を重視するあまり、親族と非親族のあいだの明確な区別を前提としてきた。それに対し、非親族を含めた親族のあり方に注目する構成的アプローチ [Carsten ed. 2000] がとられるようになり、血縁に基づく親族と非親族との区別を曖昧にしたといえる。当然、これまで親族と区別されていた隣人についての研究にも影響を及ぼしたといえる。本研究も、チベット系社会を例に、親族と非親族のあいだの区別を前提としない形で隣人との関わりについて考察し、両者についての従来の考えを再検討したい。

1 スピティにおける親族ニリンの詳細については、中屋敷 [2014] で論じた。

1-2 先行研究と問題点

1-2-1 親族と非親族のあいだの明確な区別——チベット系社会における親族と非親族をめぐる研究

ここではチベット系社会における親族と隣人をめぐる研究をとりあげ、これらの研究では、親族のなかでも出自や世帯に焦点があてられ、隣人や友人、あるいはそれらを含む擬制的親族はあまり注目されてこなかったこと、言い換えると親族と非親族が明確に区別され前者が注目されてきたことを示す。

本論が対象とするスピティはインド先住のチベット系民族が住む地域である。チベット系社会における親族研究では、一妻多夫婚や父系出自、世帯に関する研究が大半を占めてきた。

棚瀬慈郎〔2008〕は、ラダックやラホール、そして本論が対象とするスピティ渓谷における世帯や婚姻、「家」のあり方、父系出自の観念の近年の変化について、人々の実践に注目して分析している。スピティでは父系出自を表す「骨」と「肉」の観念が希薄化し、他の地域でもその重要性が低下していることを指摘するが、出自以外の日常生活を支える親族範疇や隣人関係には触れていない。

Barbara Nimri Aziz〔1978: 117-122〕は、ネパールのソル・クンプに形成された D'ing-ri 出身者の難民キャンプでの調査から、父系出自の重要性のみが強調されてきたのに対し、世帯の重要性を強調した。世帯の重要性への注目により、養子取りの慣行について説明することは可能になったが、世帯より広い範囲の親族としてはキンドレッドの存在を指摘するのみで、その内容には触れていない。また隣人関係についてもあまり注目していない。

上記の研究においては、社会関係のなかでも親族や婚姻によるものに注目がなされ、そのなかでも出自と世帯に焦点化されてきたこと、それゆえに親族とそれ以外の関係が明確に区別されるとともに、人々の近隣住民との関係性はほとんど触れられてこなかったことがわかる。本論では、これまであまり注目されてこなかったチベット系社会における隣人関係に焦点をあてることで、隣人関係についての理解を深めるだけでなく、従来の親族理解の再検討にもつとめたい。

1-2-2 地域共同体における紐帯と連帯感の関連性——社会学における隣人との関わりをめぐる研究

隣人研究は、特に都市社会学において都市化の文脈のなかで研究される傾向にある。つまり、従来想定されていた地域（村落）共同体と異なり、産業化や官僚化が進む都市において、親族や隣人、友人といった社会関係がいかに影響を受け、変化するのかにについて検討がなされてきた。それらは主に、明確な境界をもつ地域共同体を想定できなくなった都市において、いかにして社会統合が可能か、という問題意識のもとで検討されてきた。

当時、社会体系の維持に中心的に関わるとされていた出自集団などの血縁関係、あるいはそれに関連する姻戚関係に注目する研究が主流だったのに対し、John Arundel Barnes は、社会関係のなかでも非親族に注目し、ネットワークという概念を分析手法として確立した〔Barnes 1954〕。

Barry Wellman も、コミュニティを地縁や親族のみならず、その他の多様な非親族との関係を含めるネットワークとして扱うことで、非親族を分析の中心的な対象とすることを可能にした [Wellman 1979]。Wellman は、コミュニティ喪失論や存続論において想定されてきた地域共同体に存在する連帯感と、つながりの構造やそこで行われる活動が注目されるネットワークを対立するものとして捉え、後者のネットワークに焦点化するべきだと主張する。そこで想定されている連帯とは、社会規範の共有とそれに基づく地域への愛着である。

Barnes や Wellman によって非親族が注目されるようになって以降、構造的なアンケート調査（補足的なインタビュー）を重視し、その結果を統計処理して分析した結果を基盤にした研究が多く提出された。大まかにまとめると、これらの研究は、村落共同体のように緊密に編まれた強い紐帯が依然として残っているのか喪失してしまったのか、残っているとすればどのようにその形は変容したのか、あるいは、ゆるく編まれた弱い紐帯が新たな都市の状況において有効性を発揮し社会統合を支えているのではないかと、といった議論がなされてきた [Wellman 1979; Granovetter 1973 など]。

これらの研究は共通して、コミュニティの統合がいかんして可能かという問題意識を共有するがゆえに、強い紐帯や弱い紐帯の有効性に注目する傾向がある。しかし、人々の非親族とのより細かい関わりに注目すると、紐帯の強弱と連帯との関連はより複雑であることがわかる。

James Clyde Mitchell [Mitchell ed. 1969] によるアフリカのゴシップの検討においては、関係が密であるがゆえに人々のあいだに緊密な情報伝達網が張り巡らされ、不倫や嫉妬などの不和を引き起こすような情報も伝わりやすいこと、それによって関係が悪化したり破綻したりしうることが示される。つまり、必ずしも強い紐帯が連帯感を生み出し、社会統合をもたらすわけではない。むしろ、隣人関係は、関係が密であるがゆえに些細なことで悪化したり破綻したりもしうるような、言い換えれば社会統合を阻害しうるような不安定性も含み込んでいる。上述のように強い紐帯の脆弱さにも目を向ける必要がある。

本論が対象とするスピティ溪谷は上述した研究で対象とされてきたような都市ではなく、山岳地帯に位置する農村地域のなかの中心地である。そのため、都市に特有の網の目の大きい関係性のあり方やその有効性について論じることができないが、逆に、網の目が細かいとされる関係性についてのこれまでの理解を再検討することはできる。つまり、都市社会学においては「強い紐帯」が連帯感を高め社会統合に貢献すると考えられてきたが、本論では、逆に強い紐帯が人々の関係を不安定にしうるという脆弱性も視野に入れながら、隣人関係の検討を進める。

1-2-3 隣人との関わりにみる道義と戦術、情動——人類学における隣人との関わりをめぐる研究

上記のことを念頭に置きつつ、次に、具体的に隣人同士の関係はどのようなものか、いかなる特徴を有するのか、あるいはどのようにして親密な関係が築かれるのかについて扱っている人類学における隣人との関わりをめぐる研究をとりあげたい。隣人関係を主題

としてあげる主な研究者としては、福井勝義〔福井編 2000〕と Theodore C. Bestor [1989, 2004] があげられる。

福井は、2000 年に公刊された『近所づきあいの風景——つながりを再考する』の第 4 章において、エチオピアの遊牧民族ボディの人々の近所付き合いについて考察している。ボディ社会におけるさまざまなレベルの人の行き来回数や動線といった具体的なデータから、自然環境と結びついた彼らの生活スタイルである頻繁な移動を行う度に、トゥイ（イエ）の離散集合が繰り返されていることを示した。それによって放牧キャンプ内に不信感をいだいたものは離れ、キャンプ内の緊張が緩和されることから、離散集合は近所付き合いにおける葛藤を解消する装置であるとした。

福井は人々の移動スタイルと自然環境、そして近所付き合いが関連すると示した点で参考になるが、統計的なデータが多いがゆえに具体的に人々やイエ同士がどのような関係を築いているのかがみえにくく、なぜ特定の人々が不和になってしまったのかわかりにくい。

この点について、Bestor は、人々やイエ同士の関係性を含め、政府の政策や文化的慣習、仕事の性質、生活スタイルなど多様な観点から隣人同士の関係を論じた [Bestor 1989, 2004]。彼は、東京における付き合いについて論じたそれまでの研究を批判し、隣人との関わりにおける独自の視点を提出する。

東京における tsukiai について調査した Reiko Atsumi [1979] は、隣人関係を義務を伴う個人間の関係と規定し、楽しみや関心の共有といった個人の自由選択によって基礎づけられる友人関係と明確に区別する。しかし、Harumi Befu [1968] は、日本の近代化に付随する社会的つながりの個人化の増大は、義務を消滅させるのではなくむしろ強化していると主張する。そして現代日本の生活においては、人々は隣人などの社会的つながりを維持する際に社会的義務と個人の自由を両立させる柔軟さを持ち合わせているという。

これに対し、Bestor は、隣人関係をコミュニティにおける隣人に関する規範によって規定されるというよりも、個人の自由選択に基づいた関係であり、そこから生まれる一対一の義務関係を含むものであると指摘する [Bestor 1989: 206]。すなわち、隣人同士の関係は、Atsumi のように社会的義務によって規定されるわけでも、Befu がいうように社会的義務と個人の自由を両立させているわけでもなく、基本的に戦術的にふるまいう関係であり、かつ対面的に関わるなかで生まれた個人間の義務関係を含むものであると主張する。義務関係という時、Bestor は、Atsumi や Befu がいうような社会規範やそれによって規定される義務関係ではなく、戦術的、対面的に関わるなかで築かれる個人間の義務関係を想定している。

Bestor によれば、東京の宮本町では戦後の支配権力が隣人集団の影響力を制限する傾向にあったことから、町会とその長は今でもコミュニティの決定を強制する権威を十分に持ち合わせていない。それにもかかわらず、隣人の社会的コントロールの形式はいくらか存在し、効果的に機能している。それは、隣人同士の関わりをなかで作りだされ、意識され、維持されるようになったものである。そして、それらが遵守されるか否かはあくまで居住者本人の良心（自由意志）に任されている [Bestor 1989: 211]。

東京の築地市場についての著書である『築地』[2007]においても、Bestorは商売に関する個人の利害や戦術が人々の関係にとってとりわけ重要であることを強調するが、同時に義理や互惠主義が関わることも示している。

Bestorは築地市場で働く人々のなかでも特に仲卸業者についてとりあげ、仕事の性質を考慮しつつ、どのような関係を築き、日々の生活を送っているのかを細かく論じる。築地では商売をきっかけとして人々のあいだに時に世代を超える長期的な関係が築かれることが指摘される。それは、供給者の商品を高値で売り安値で仕入れるためには、何よりも「情報の流れ」[Bestor 2004: 362]が重要であり、信頼できる情報交換関係は長期の安定した取引関係を通じてしか築けないからである。

さらに、競争相手（友人や従兄弟）のもとで修行をさせる徒弟制度によって技術を交換しあうネットワークが築かれ、世代を超えて商人同士のあいだに相互義務や信頼関係が築かれている。それと同時に、徒弟制度は「擬似的親族関係」を形成していた。それは、店を継いだり独立した店をもったりするのは必ずしも魚屋の子孫ではなく、やり手の番頭だったからである。この関係は時間が経つにつれ結婚や養子縁組による関係と判別がつかなくなる。実際に、年に1度か2度開かれる、ある同窓会に集まる築地仲卸業者は、互いに自分との関係を明確に理解していない。「親方徒弟制度なのか、親戚なのか、姻戚なのか、はたまた独立した子どもたちの関係なのか」[Bestor 2004: 423]、曖昧であるが、結婚式や葬式には呼び合う間柄である。

このように、築地市場では商売に関連した利害や戦術を中心にして、義理や互惠主義が入り交じりつつ関係が成り立っている。また、築地市場では親族とも、擬制的親族とも、師弟とも、近隣とも判別がつかないが人生の重要な行事には呼び合う長期的な人間関係が築かれるなど、より柔軟な関係が築かれている。

ものを売るという基本的な目的が明確な築地市場における関係では、Bestorのいう通り戦術的な姿勢が強調されざるをえない。筆者が調査したスピティの近所付き合いにおいては、築地市場における関係のように商売という目的のもとに関係が築かれるわけではないため、必ずしも戦術が前面に押し出されるわけではない点は考慮しなければならないが、日常生活を円滑に進めるためにも戦術的なふるまいは不可欠である。義理や親密さにも注目する必要がある。

また、スピティにおいても、Bestorが指摘したような親族や隣人、友人と明確に言い切れない曖昧な関係が人々のあいだに築かれている。そこでは、Bestorが指摘したような義務や個人の戦術、そして規範や日々の生活における必要性が複雑に絡み合っている。

上記した戦術的な側面を理解するためには、Jeremy Boissevain [1974] の議論が参考になる。彼らは社会規範が社会関係のあり方を決定するのではなく、文化的な制限のなかで人々が個人の選択によって誰に従うのか、関わるのかを決めたりそれを変更したりしていると主張する。しかし、この視角のみから、Bestorが指摘するような一見矛盾するようにみえる戦術的にふるまう個人間に生まれる義務関係や、スピティにおいて観察された戦術やリスクを度外視したふるまいを十分に理解することは難しい。

この点を理解する際に参考になるのが、「関わり合い (relatedness)」[Carsten 1997;

Carsten ed. 2000」の概念である。Janet Carsten は、血縁や姻戚関係といった生物学的、法的側面の優位性を相対化させ、むしろ日々の対面的な関わりによって親子関係や親族関係が形づくられる側面に焦点をあてることで、他人をも親族に含めて考えることを可能にした。

Carsten [Carsten 1997, 2004; Carsten ed. 2000] は、移動が激しく移民の多いマレーシアを対象に、系譜や出生のつながりの象徴である「血」を、母乳や食物と並置される（身体的）サブスタンスの一つに過ぎないとし、生物学的側面の優位性を相対化した。なぜなら、食料は血へ変化するからである。親子でさえ、母乳や食物などのサブスタンスの共有といった出生後の関わり合いのなかで「血」がつくられ、母と子は親子に「なる」とした。言い換えると、育児と婚姻に関わるような長期的な食料と生活空間の共有と、親切なもてなしや共食といった小さな諸行為を通して、それまで家族や親族が存在しなかった場所に家族や親族、そして地域のつながりがつくりだされるのである。

このように、Carsten は、関わり合い概念を打ち出すことで、生物学的側面の優位性を相対化させ、日々の関わりを通して、他人が家族や親族になり、そして地域のつながりがつくられるプロセスを提示した。また、これまで議論されてきた道義と戦術のほかに、日々関わる過程で親の子に対する愛情などの「情動」が育まれることを指摘した。

筆者が対象とするスピティ地域においても、日々の関わりを通して隣人同士のあいだに情動を含む親密な関係性がつくられていく様子が観察された。しかし、Carsten はほとんど触れていないが、隣人同士の関係性は必ずしも親密さのみによって規定されるわけではなく、そこには上述したような個人の利害も絡んでくる。また、親密であるとはいえ、些細なことをきっかけとして仲違いしたり、不満を言い合ったり、一時的に疎遠になったりもしうるという隣人のあいだの両義的な関係性が観察された。

そこで、本論では、北インド・スピティ渓谷に住むチベット系民族を対象に、どのような隣人関係が築かれているのかを、強い紐帯の危うさについて示唆している Mitchell の視角や、Bestor や Boissevain の戦術論の視点、あるいは道義の視点、そして Carsten の関わり合いの視点から検討し、明らかにすることを目指す。それを通して、具体的な隣人との関わりについて検討する際には道義と戦術のほか、情動の視点が必要であることを明らかにし、その上で強い連帯の脆弱性を示す。

1-3 調査期間と方法

フィールド調査の期間は北インド・スピティ渓谷にある C 村において通算で約 20 ヶ月間行った（2009 年 9～12 月、2010 年 9～10 月、2011 年 8～10 月、2012 年 10 月、2014 年 4～8 月、2014 年 9～2015 年 3 月、2015 年 11～12 月）。調査対象は、社会階層における中間層に位置するチャチャンの人々である。筆者を受け入れてくれた C 村の家族の家に住み込み、その家を拠点に参与観察ならびに聞き取りを行い、時に写真撮影やレコーダーを用いたインタビューを行った。必要に応じて近隣の K、Y 村でも調査を行った。言語は主にチベット語の西部方言を用いたが、インタビュー形式をとる際には C 村の友人に通訳を頼み、英語を用いることもあった。村や主な登場人物について、本論では仮名にて表記する。性別、年齢は男性（50 代前半：2011 年時点）のように表す。特に記述がな

ければ年齢は 2011 年時点のものである。なお、現地語については、初出の場合にはカタカナ表記とあわせてアルファベット表記も行うが、辞書に載っていない用語に関してはカタカナのみ表記する。

1-4 論文の構成

本論は、北インドのスピティ渓谷に住むチベット系民族のあいだで、どのような隣人関係が築かれているのかを、道義と戦術、そして情動の視点から明らかにし、関係性の両義性について指摘することを目指す。そのため、つづく第 2 章では、調査地の概要を紹介し、調査地の特徴を示すとともに、以降で隣人との関わりを検討するにあたり、比較対象としてスピティにおける親族関係のなかでも日々の生活を支える親族範疇ニリンについて概観する。第 3 章では、日々の生活における隣人との関わりの概要を示したのち、事例をとりあげながら、義務的な相互扶助関係が築かれていると同時に、そこでは日々の関わりに基づく親密な関係性が築かれていることを示す。第 4 章では、結婚式の宴会や死者儀礼といった行事においても隣人たちが重要な役割を担い、手伝いを行うとともに、感情的な支えをも行っていることを示す。第 5 章では、親族ニリンを超えるような隣人や友人のふるまいについて述べ、それには日々の関わりのほか、宗教的な信仰が関連することを示す。第 6 章では、上記のように親密な関係を築きうる隣人であるが、時に予期せぬ結果やジレンマが生まれるとともに、些細なことをきっかけとして関係が疎遠にもなりうるなど、両義性を有していることを示す。考察において理論的な検討を行い、最後に今後の課題を記すこととする。

009

2 調査地概要

この章では、調査地とそこでの親族関係について概観したい。それにより、スピティにおける隣人関係について検討する際、その特徴を浮き彫りにすることができるだろう。

2-1 調査地域の自然環境と生業活動

本論の調査地はインド、ヒマーチャル・プラデーシュ州ラホール・スピティ地区スピティ渓谷に位置する C 村である。ヒマラヤ山脈に連なる標高約 3600m の高所にあリ、中国に接する地域である（図 1）。

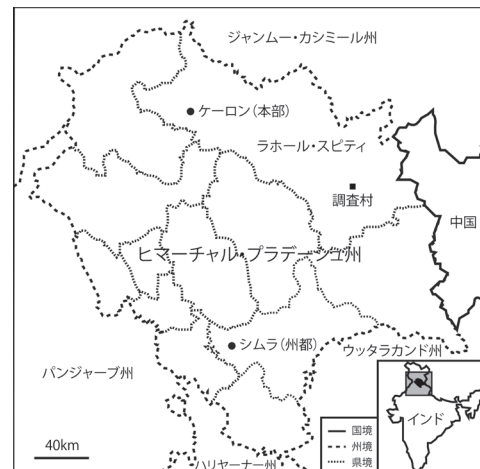


図 1 調査地の地図、出所：筆者作成

あたり一面岩山に囲まれ、スピティ川沿いに約 159km に渡って村々が点在している。スピティ全体の人口は約 12,457 人である。なかでも本論が対象とする村落自治体には C 村、K 村、Y 村が含まれ、人口構成はそれぞれ 1,694 人（460 世帯）、98 人（21 世帯）、27 人（7 世帯）である [Census of India 2011]。地元住民はほとんどがチベット仏教徒であり、なかでもサキャ派の信徒である。言語はチベット語の西部方言が用いられる。

気候は高山気候あるいは亜寒帯に位置づけられ、1 月にはマイナス 30 度に達する。住民は土壁で作られた保温性の高い住居に住み、暖炉で薪木を燃やすことで寒さを凌ぐ。そのために必要な薪木を安く手に入れ、配達費を抑えるために近隣住民同士でまとめて購入するといった工夫がとられる。1～3 月には雪がふり、時に 1 日で 50cm 程度の積雪があることから近隣同士で雪かきの相互扶助も頻繁に行われる。

またスピティは標高が高く水に乏しい地域である。冬には井戸水すら満足に出ないこともある。国境付近であることから現在では軍も水の供給を行っているが、それでも供給される水を近所同士で協調して分配しなくてはならない状況にある。農地では大麦とアオエンドウ豆が育てられるが、水量の関係から生産量には限りがある。

C 村には、政府関連の役所や学校が多く集まり、多数の店が集まる市場もあり、スピティ渓谷のなかでは中心的な村である。他の村に役所がほぼなく学校も少数しかないことを鑑みると、C 村はスピティのなかでは特殊な場所だといえる。これはスピティがインド政府の管轄下に置かれて間もない頃からであり、当時は中等学校以上の学校や中心的な役所は C 村にしか存在しなかった。そのため、他村の人々は C 村に歩いて買い物や役所での手続きにきた際、あるいは子どもの勉学のために、C 村の親族や友人、知り合いに宿泊や居候をさせてもらうなど頼っていた。

なお、C 村は、政治的、経済的な中心であり、また農業を営む人の割合は全体の 1 割程度と必ずしも高くない。しかし、高山に位置し、生活様式が自然の条件に大きく左右され、冬には店もほとんど閉まり、村人ほぼ全員が顔見知りであることなどを考慮すると、農村地域の周辺一帯のなかで中心的な役割をもつ場所であるといえる。

2011 年のセンサスによれば、C 村では 735 人（男性 454 人、女性 281 人）が給与取得者である。職業は、40 人というごく一部が農業を営む一方、自営業や第三次産業に従事する人も多い。例えば雑貨店、観光業、レストラン、タクシードライバー、コントラクター（政府関連の仕事を請け負う建設業に関わる職業）がある。政府雇用の職（公務員 60 人程度、学校教師と学校事務員 40 人程度、警備員、労働者）に就いている者も多い²。

チベット系社会であるスピティには 4 つの社会階層リグ (*rig*) がある（カーストとも呼ばれる）。かつての領主の家系にあたるノノ (*nono*) を頂点として、中間層のチャチャンないしチョザン、そして下層にゾとベタがある³。C 村の社会階層別の人口比率は、筆者が確認できた 1,059 名中、ノノ約 6 名 (0.5%)、チャチャン約 960 名 (94%)、ゾとベタ

2 政府雇用のうち、学校教師と事務員の就業人数は、1993 年から 2005 年まで村長だった男性（47 歳：2011 年時点）からの聞き取りによる（2011 年 10 月 8 日）。

3 社会階層であるチャチャンやチョザン、あるいはゾやベタ、その他いくつかの用語はチベット語の辞典には存在しないため、転写表記を行っていない。

93 名 (5.5%) である (2011 年時点)。ノノは政府雇用や NPO の仕事に就くとともに広い農地を有する。チャチャンは農業や政府雇用、自営業などの職に就く。ゾは鍛冶屋を営み、ベタは結婚式などで楽器演奏を行う楽師のほか、政府雇用の職を有する者もいる。本論の対象は人口の大半を占める中間層チャチャンの人々である。

スピティは 10 ～ 19 世紀までは領主制であったとともに、グゲ王朝やラダックのナムギャル王朝といったチベット系の王国によって長く支配されてきた。19 世紀にラダック王国が減んだ後、1846 年に英領インドの直轄領となった。1947 年にインド共和国としてイギリスから独立すると、ラホールとスピティはパンジャブ州に編入された。1960 年にラホール & スピティ地区 (district) として一つに併合され、インド政府によって指定地域 (Scheduled Area) に指定された。そして 1966 年にヒマーチャル・プラデーシュ州の管轄下に置かれることになった。

2-2 スピティにおける親族関係ニリン

この節では、チベット系社会において重視されてきた父系出自の観念を概観した後、現在スピティにおいて日常生活を支えている親族ニリンについて簡単に説明する。

これまでチベット系社会における親族研究において注目されてきたのは父系出自の観念である。これはスピティにおいても同じである。スピティには 19 世紀のはじめまで「骨 (*rus pa*)」と「肉 (*sha*)」という父系出自の観念を示す用語が存在し、特定の「骨」の名称、つまり父系出自集団が存在したかのように記述している報告もみられる [Punjab Government 2012: 93]。婚姻、相続など多くの領域で父系出自の原理が支配的だった。

しかし現在では、相続はいまだ父系の原理が支配的で夫方居住が一般的ではあるが、「骨」の名称は忘却され、婚姻についても父系出自を共有する者同士の婚姻は忌避されるものの、それは系譜上認識される範囲内に限定され、婚姻においても父系出自の原理は弱まっている。

こうした系譜を重視する父系出自の観念のほかに、日常生活を支えてきたと考えられるのがニリンという親族関係である。ニリンとは、自己を起点としてたどられる親族範疇であり、血縁関係、姻戚関係を有する者のなかでも、特に親密な関係を築いていると認識される者が含まれる。そのため父系出自集団とは異なり、父方であれ母方であれ、自己にとって親密な関係を有する者がニリンに含まれる。これはキンドレッドに似ているが、それが個人的な親密さによって規定される点に特徴がある。ニリンの関係は、日常生活や儀礼における物や労働力の交換、家の行き来、共食などを通じて構築され、日常生活を送るための重要な基礎となっている。このように、ニリンは隣人とともに人々の日々の生活を成り立たせている関係のうちの一つである。

3 日々の生活における近所付き合い

本章では、スピティにおける近所付き合いがどのように行われているのか、そこでどのような関係性が築かれているのかを説明する。そのために、まず日々の生活における近所

付き合いを概観した後、具体的な事例をいくつか提示し、親密な関係が築かれていることを示す。

3-1 日々の生活における近所付き合いの概要

この節で示す近所付き合いの概要は筆者が滞在していたラモ家を中心に描かれる。ラモ家は、ラモ（女性：55歳）とその夫（60代半ば）、娘（34歳）と息子（30代前半）の4人暮らしである。年齢は2015年時点のものである。当主はラモの夫であるが、筆者が頻繁に関わったのがラモであり、ラモを中心とした近所付き合いを観察したことから、本論ではラモ家と記述することにする。4人での居住は、調査地域で筆者が確認できた居住形態79件（370人）中28件であり、もっとも多い居住形態である。その次に5人居住が13件、3人居住が8件とつづく。そのため、ラモ家はC村の一般的な居住形態として考えられる。

筆者の滞在していたラモ家は、主に、周辺の6つのカンビジマック、そして異母妹2人と頻繁に関わっている（図2と図3を参照）。ここでいうカンビジマックは、チベット語のカンパ（*khang pa*）とジマックからなると考えられる。カンパとはカンミグ（*khang mig*）と同じく家屋を指す用語である。ジマック

は、家族や世帯、家庭を意味するジマツ（*gzhis mad*）と関係があるかもしれないが確認がとれていない。カンビジマックは家屋の構成員を指す際に用いられる。しかし、カンビジマックは必ずしも居住と生計をともにする集団とは限らないため世帯の要件を必ずしも満たさない。スピティにおけるカンパは、棚瀬〔2008〕が報告したキュムのように、村運営の基本的な単位であり、水利権や農地の使用権、僧院を維持するための負担の単位となる。しかし、一つのカンパに一つのカンビジマックが対応するかどうかは定かではない。それは、全てのカンパに屋号があるわけではなく、また次男以降は結婚後、自ら家を建て新たなカンパをつくるからである。その場合でも出身のカンパは変わらない。また婚出した女性は夫側のカンパに含められることになるが、出身のカンパが変わることはない。カンビジマックは厳密には定義の困難な概念であるが、ひとまず両親と子どもからなる最小の親族集団と仮定しておく⁴。

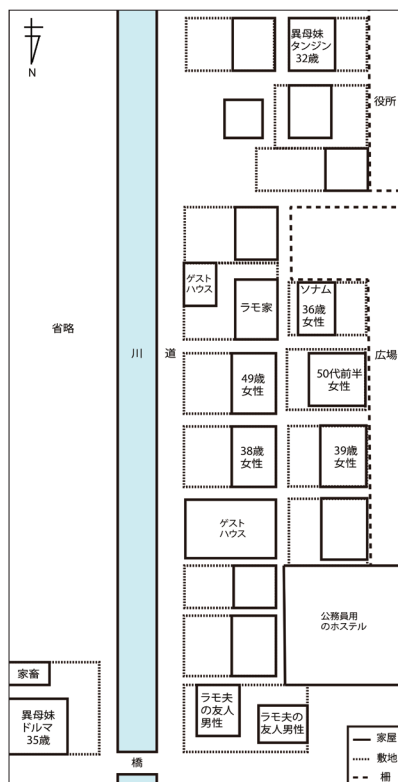


図2 ラモ家周辺の近隣住民の家屋のモデル図
出所：筆者作成

4 カンビジマックの概念については別途検討する必要がある。

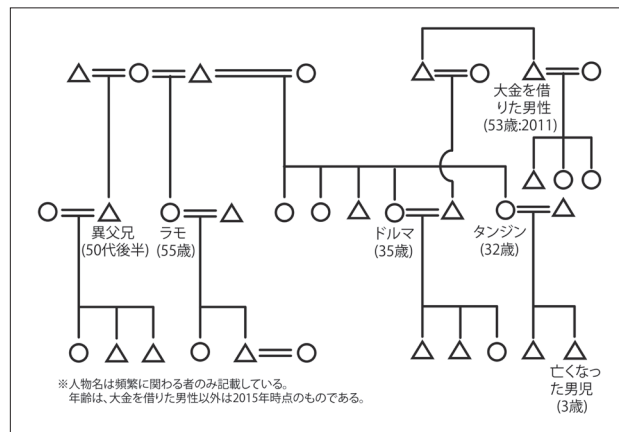


図3 ラモを中心とした簡略な親族図、出所：筆者作成

春から夏にかけては、農家にとっても、観光シーズンであるため自営業の人にとっても多忙な時期となる。ラモ家の人々は、観光客用のゲストハウスの運営や管理、そして靴屋の仕事が忙しくなるが、合間をみては近所の家にお茶を飲みに行ったり、朝ご飯を提供してもらったり、自家製ヨーグルトをわけてもらったりする。その逆も然りである。その場合、少なくとも1時間近くは談笑する。

近所の人に食事を提供してもらった場合、後に同等の食事を提供しなくてはならない。例えば、肉餃子でもてなされれば、後に肉を使った料理（例えば水餃子や肉の煮込み料理）でもてなし、朝食に呼ばれれば、朝食もしくは午後の間食に招待する。他にも、何か食べ物を受け取れば、後に他の食べ物で返礼をすることが多い。特に料理を分け与えてもらった場合には、空の皿をそのまま返すことは失礼なものと捉えられ、必ず皿に何か返礼をのせる。この食事提供や物の贈与交換は厳密なものではないが、ある程度人々に意識されており、近所の人々は定期的に食事と呼びあったり贈りあったりする関係を築いている。

秋には、冬に向けて大麦を使った自家製の蒸留酒を作る際、隣人に声をかけて3～4時間にわたって手伝ってもらったり、手作り絨毯を編む際には、家を行き来しながら終日かけて作業の手伝いをしあう。毎年冬にはラモの夫と娘がデリーに出稼ぎに行くため、10月から3月まではラモと息子の2人きりの生活になる。冬は雪と寒さのため、自営業者は、閉店するか、数時間だけ開店する場合が多い。水道管が凍るため水汲みに行く必要があるが、その時には隣人同士で声をかけあい2人以上で行くことが多い。互いに水を入れたポリタンクを背中に担ぐ手助けをするためである。

屋根や庭の雪かきをする際には、毎回ではないが、早めに終わった家の人が他の家の雪かきを手伝いに行く。雪かきに関しては、屋根の面積が大きい家の人がいつも手助けしてもらうことになるが、働いてもらう分、家の人々はミルクティーや揚げ菓子、時に食事をふるまってもてなす。また、雪かきの返礼として、絨毯を編む手伝いをすることもある。

ここで、2014 年 11 月中（1 日から 30 日までの合計 30 日間）ラモ家に訪問しにきた人

とその内容を確認したい。ラモがこの1ヶ月間に他の家を訪問したのは、筆者が観察できた限り、19回である。そのうち、ニリン宅を訪れたのは10回(52.6%)（うち6回はラモの異母妹の息子が亡くなり手伝いのため）、近隣住民や友人宅を訪れたのは9回(47.4%)である（小数点第二位以下四捨五入）。そのほか、ラモに頼まれて筆者が近隣住民宅を訪れたのは5回である。

逆に、ラモ宅に人が訪れた回数は、全部で116回だった。そのうち、近隣住民52回(44.8%)、ニリン32回(27.6%)、知り合い22回(19%)、ゲストハウスの客人6回(5.2%)、友人2回(1.7%)、下層の人2回(1.7%)である。

上記の数字をみると、ラモが誰かを訪問した回数より、ラモ宅への訪問者の訪問回数の方が圧倒的に多い。近所付き合いに関しては、年齢が関係していると考えられる。スピティでは年少者が年長者を敬う。例えば、部屋のなかでは扉から離れたなるべく奥に年長者、入り口付近に年少者が座るなどである。家の行き来に関しては、当人同士の関係にもよるが、筆者の印象では年少者が年長者の家を訪れることのほうが多い。

ラモを含めた7つのカンビジマックのうち、女性の年長者は2015年時点で55歳のラモである。その他の女性は、50代前半、49歳、47歳、39歳（個人店を営む仕事仲間）、38歳、36歳（全て2015年時点の年齢）とつづく。隣人たちは、お茶に誘われてきたり、雑談をしにきたり、調味料や食料を分けてもらったり、身内の不幸事について相談したり、子どもを預けにきたり、何か手伝いにきたりする。また、ラモが雑貨店を営んでいるため、買い物にきたついでに寄って行くことも関係していると考えられる。

なお、スピティでは、一般的に近隣住民に対しては「ヤト (*ya do* : 対の一方、仲間)」あるいは「キムツェ (*khyim mtse* : 近隣住民)」、またはヒンディー語の「パドシー (*padosi* : 隣人)」の呼称が用いられる。

ラモのニリンにあたる人に関しては、ラモに牛乳や水などの贈り物をもってきたり、ラモに言われて物を取りにきたり、手伝いにきたり、調味料やにんにくなどの食料を分けてもらうため、あるいは暴力事件や親族の死亡の伝言のために訪れたりしていた。特にラモの異母妹2人と異父兄夫妻が頻繁に訪れる。彼女たちの場合、収入などの金銭や病気に関する相談、一時的に子どもを預けるため、あるいは仕事に行くまたは帰る途中寄り道でラモ宅を訪れる。異母妹やラモの嫁（この女性は2014年5月に息子の妻として迎え入れられたが、就学のためスピティを不在にしている期間が長かった）の姻戚関係の訪問の多さにも年齢が関係していると考えられるが、異父兄に関しては逆であり、関係によっては異なりうる。また、ラモの嫁の姻戚関係の人々が他村からC村に役所での手続きや買い出しにきた際にラモ宅に寄ることも関連している。

上述した相互扶助関係の存在には、スピティにおける助け合うべきであるという規範も関係していると考えられる。スピティにおいては、祝い事があるか、困難な事が起こった場合、親族や隣人、友人はもちろんのこと、多くの村人が祝いにきたり、手助けにかけつけたりする。これは、祝い事や困難な状況に直面した時には助け合うべきであるとする規範のようなものが存在するからである。これらの際に訪れないことは、良好な関係を維持するつもりがない、あるいは敵対関係にあることを暗に示すことになる。これは以下の事

例をみてもわかる。

事例 1

ラモは 2014 年 11 月 15 日、ラモの知り合いの誕生式に行けず、慣習である祝儀すら渡せなかった際、「モラ（男性 1 人による祝辞に伴い、祝儀を渡した人の名前と金額が読み上げられる行事）の時にラモがきてないと思われる」と言い、そのことを非常に心配し、その後数日この話を何度も繰り返していた。結局、後日人を通じて金銭を手渡してもらうことになった。

また、こうした規範には宗教的に権威をもつ僧侶による発言も関わっている。ラモはしばしば筆者に、チベット仏教ゲルク派の宗教的指導者ダライ・ラマ 14 世が隣人と良好な関係を築くべきであると説教していることを話した。

3-2 隣人との日々の関わり——ソナムの場合

次に、隣人関係の一例として、隣の家に住むソナム（47 歳：2015 年時点）という単身世帯の独身女性とラモとの関係を取りあげる。事例を通して、ソナムは、他地域から C 村に移動しラモの近隣に住むことで親しくなったこと、そしてラモとソナムのあいだに築かれている相互扶助関係は必ずしもバランスがとれているものではないとともに、両者のあいだには日々の関わりを通じた感覚的なつながりがみてとれることを示す。なお、C 村では単身世帯の女性は彼女 1 人のみである。

ソナムは他村の出身で、仕事（Public Works Department という州における道路、橋、ロープウェイ、そして建築物の計画、建築、維持を行う部門のオフィス用とそこで働く公務員の私生活用の水運び）をするために C 村に住んでいる。確認はとれていないが、ラモの娘によれば、ソナムは彼女の両親が結婚を決め、一度スピティと近接するキノール地方へ嫁いでいったが、夫と相性が悪く結婚式後すぐに C 村まで歩いて帰ってきた。ソナム自身は未婚だと筆者に話した。彼女は C 村の彼女のニリンの家屋の一室に住まわせてもらっている。とはいえ、ソナムのニリンと寝泊まりや食事、生計は別であるため、スピティでは珍しく 1 人暮らしである。1 人暮らしであるためか、彼女は頻繁に隣人や友人にお茶や食事に誘われ、彼女たちの家で食事をしたり寝泊まりする。特に、家族がスピティを離れ、一時的に 1 人になるような場合には、ソナムの友人や隣人に必ずといっていいほど呼び出される。

ソナムは友人や隣人のなかでもラモと親交が厚く、何も用事がない時にもよくラモ家にやってくる。特に冬には毎日のように訪問する。ソナムは朝、筆者が牛乳をとりに行く 8 時半から 9 時前後にやってくる。何も言わずに居間まで入ってくることもあれば、窓から覗き込み、何をしているか確認してから入ってくることもある。そしてラモ家でミルクティーを飲むことが習慣となっている。その後、ラモまたは筆者と水汲みに行く。しばしば朝ご飯とともに食べる。その後は互いに仕事や用事にとりかかるが、時に 14 時過ぎにはラモ家で一緒に昼食を食べ、その後庭で日にあたって編物をしながら雑談をし、時には

夕飯を一緒に作って食べ、そのまま寝泊まりすることもある。

話す内容はその時々で変わり、政治や野菜の高騰、村の出来事から、料理、水、家具や家族の話まで、時事的な話から個人的な話まで話題になる。冗談も頻繁に持ち出され、ラモの夫が不在の時には酒も入って踊りだすことがある。

この他に、蒸留酒を作る時や、暖炉の薪を運ぶ時、客人が多く忙しい時などはラモがソナムに手伝いにくるよう頼む。ラモの息子もソナムが家にいることは当たり前になっているようで、特に気にする様子もない。

上記のラモ宅に近隣住民が訪れた回数 2014 年 11 月中 52 回のうち、38 回はソナムだった。この訪問回数にはソナムが一日のうちに何度か訪れた回数も含まれている。日数にすると、30 日間のうち 25 日訪れていた。この数字からも、ソナムとラモが頻繁に関わっていることがわかる。また、ソナムがラモ宅を訪れた 38 回のうち、25 回はお茶や食事、雑談のため、7 回は一緒に水汲みに行くなどの共同作業のため、6 回はラモ家の水汲みなどの手伝いのためだった。逆に、ラモがソナムを訪れた回数は 4 回、そのうち 2 回はいたずらのため、1 回は食事のため、1 回は手伝いのためだった。

この数字からは、ラモとソナムの関係が単なる手伝いの時だけ呼び合うような関係ではないことがわかる。また、ソナムがラモを手伝うことがほとんどであり、食事やお茶をラモから提供されるとはいえ、それらもソナム自らが作るために返礼となっているのか不明である。この点について筆者がソナムに尋ねると、彼女はたいてい「問題ない」、あるいはラモの脚が悪いために「彼女にとっては（水汲みは）大変だから」と答える。ここには必ずしもバランスのとれていない不均衡な関係性が築かれていることもわかる。

また、訪問する頻度の高さだけでなく、あるいはそれゆえに、ラモはソナムが家にきたか否か、どこにいるのかを気にかけていた。

事例 2 隣人の姿がみえないと気にかける

2014 年 12 月 4 日の夕方、ラモは数日間ソナムをみかけなかったため、「今日はソナムはきた？こなかったの？」と筆者に聞き、筆者がこなかったことを伝えると、彼女は考える様子で「チョンモ（ソナムの友人、女性：40 代後半）のところに行っているに違いないね。チョンモの旦那が下（都市）のほうにいつてしまって、彼女 1 人であるから」（2014 年 12 月 4 日）と話した。同日の夜、ラモと夫と一緒にソナムの携帯に電話をかけ、別人のふりをして作り声で「扉開けて、扉。何してる。どこにいる」と笑いを押し殺しながら言い、ソナムをからかっていた。翌日、ソナムはラモ宅を訪れ、昨日の電話はラモたちの仕業だとわかったことを笑顔で筆者に話した。

このように、単なる労働交換や贈与交換などの形式的な相互扶助関係には収まりきらないような関係性がラモとソナムのあいだに築かれている。

3-3 居候との関わり——筆者自身の経験

この節では、筆者自身も滞在中はソナムのように、あるいはそれ以上にラモたちと接し、ソナムとも頻繁に関わることを通して、ラモたちの日々の感覚のなかに組み込まれるとともに、義務を負う対象とみなされるようになったことを示す。

筆者はスピティ滞在時、ラモと同じ家屋に住み、水汲みや牛乳運び、野菜の買い出し、食事作り、食事、片付け、掃除、犬の世話、店番、雪かきのほか、蒸留酒づくりや絨毯製作、儀礼の手伝いなどをする。何も仕事がない時にも、ラモと居間や中庭、隣人宅でお茶を飲み雑談をして時間を過ごす。なお、筆者は月に 6,000 ルピー（約 12,000 円）を支払いしばしば野菜や生活必需品を買っていたことから必ずしも手伝う必要はなかったが、ともに暮らすうちに手伝うようになった。

筆者がラモ宅に滞在したのは、調査期間約 20 ヶ月のうち約 19 ヶ月間である。2009 年に 4 ヶ月間滞在した際には毎日同じ部屋で寝泊まりし、それ以外の期間は家屋のなかの一室を与えてもらい、週に 2 日程度、昼間に疲れて 1 人になりたい時（約 2 時間）と、毎日寝る時には自室にいた。そのほか、役所の人や村人にインタビューをしに行く時や、寺院への参拝と僧侶から読経の指導を受ける時以外は、基本的にラモと過ごした。

筆者の場合、共住し、基本的にほとんどの時間をラモ家で過ごしていたこともあり、ソナムのラモ宅への訪問回数のように回数で表すことは難しい。そのため、1 日のうちおよそ何時間をともに過ごし何をしていたのかを示したい（表 1 参照）。この時期、ラモの夫と娘はデリーへ出稼ぎに行っており不在であった。また、隣人のソナムとラモの嫁の母方オジにあたる僧侶⁵が、しばしばラモ家にきて滞在していた。

表 1 筆者がラモとともに過ごした時間と活動内容の目安（2015 年 1 月中）

時間	誰とともにいたか	活動内容	時間(分)
8:30-9:10	ラモ	お湯とお茶づくり、暖炉に火をつける、仏間での祈り	40
9:10-9:50	ラモ、(ソナム)	朝食作り、水運び、牛乳運び	40
9:50-10:30	ラモ、息子、(親族の僧侶)	朝食、後片付け、掃除、犬の餌やり	40
10:30-11:30	ラモ、あるいは一人	お茶、雑談、あるいはラモは店番	60
11:30-13:00	ラモ	昼食づくり、雑談、店番	90
13:00-14:00	ラモ、(ソナム)	昼食、片付け	60
14:00-16:00	ラモ、あるいは一人	居間か中庭でくつろぐ、雑談、編み物、お茶 あるいは、寺院参拝、ラモの親族と出かけるなど	120
16:00-17:00	ラモ	雑談、あるいは居間でラモと雑談しながらデータ入力	60
17:00-19:00	ラモ、息子、(親族の僧侶、ソナム)	お茶、夕食づくり、雑談	120
19:00-21:30	ラモ、息子、(親族の僧侶、ソナム)	雑談、後片付け	150

※カッコ内は、常に一緒にいるとは限らない人物である。

上記のほか、積雪があった日には、1日のうち5～6時間ほど雪かきをする。2015年1月中積雪があったのは合計9日間である。

10:30-11:30と14:00-16:00の時間帯はラモと別の場所にいることもしばしばあったため、その60分間と120分間を差し引くと、1日のうち、約10時間をラモやその息子、ソナム、親族の僧侶と過ごしている。スピティでは家庭内の仕事が多く、手伝いをする時間が長くなるが、何か用事をする時だけでなく、暇になった時には必ずといっていいほど呼ばれ、一緒にお茶を飲んで雑談をする。

これは単なる筆者の思い込みだけではないと考えられる。2014年の12月からスピティを離れる2015年の3月上旬まで、ラモは毎週のように、筆者に自室ではなく居間で彼女と一緒に寝ないかと誘ってきた。筆者も2009年の時のように一緒に部屋で寝たかったが、寝る前にその日一日のデータをまとめなければならなかったことと、ラモのいびきのことを考えて断り続けた。

また、2015年の年明けから訪問客が多く、彼らが筆者に「どこに行っていたのか」、「あの日／昨日は何をしていたのか」などについて質問してくることが多々あった。2015年1月10日も朝から訪問客に昨日どこに行っていたのか細かく聞かれ、筆者は1人になりたくなくなり、朝食の片付けの後、掃除をせずに珍しく自室に引きこもった。するとしばらくして、ラモがドアの外から、「チュキー（筆者のあだ名）！中（居間）は火をたいて暖かいよー！人いないよー！おいでー！」と叫んだ。その後、筆者は居間でしばらくラモと雑談したり本を読んだりした。

これらのことから、ラモとソナムの関わりのように、単に手伝いの際にのみ関わる関係ではないと考えられる。かといって、互いに意図して積極的に関わろうとしていたわけでもない。日々関わるうちに、ともにいることが当たり前になり、互いに気遣うようになったのだと考えられる。

こうしてともに生活するなかで、いつの間にかラモたちとのあいだに「いつも一緒にいる」ような感覚が芽生えるようになった。以下でこれに関連する事例を2つ紹介したい。

事例3 何かが欠けているような気がする

2009年9月から12月のあいだラモ家に滞在していた際、キッバル村で用事があったため2週間ほどラモ宅を不在にした。筆者が帰ってきた時、ラモの息子が、「母もソナムも、チヒロがいなくて、何か欠けているような（無いような）気がするって言っていたよ」と筆者に伝えた。ソナムも、「心のなかが空になった（セムパ・トンバ（*sems pa ston pa*：セムパ・トンバだがスピティでは少し発音が異なる）は直訳すると心が空の意）」と話した。

「セムパ・トンバ」という表現は、親しい人が遠くへ行ってしまったことや、自らの配

5 彼は、カルナータカ州のゲルク派僧侶のための寄宿舎の建設費を獲得するため、冬物のジャケットを都市で仕入れ、ラモ宅に滞在しながらC村でそれらを住民に売っていた。

偶者や子どもが他界してしまったことに触れる際に用いられる。例えば、夫を事故で亡くしたラモの異母妹から、「夫が亡くなって心が空になった」と聞かされた（2014年6月）。

2014年に筆者がラモ宅に滞在していた時も、ラモや彼女の娘はしばらく筆者の姿がみえないと、「チヒロー！どこにいるの／何してるの」と大声を出して確認しようとし、それでも答えないでいると断りなく部屋のなかまで入ってきていた。

これはソナムに関しても同じである。ソナムもラモ宅を訪れた際には必ず、筆者が家にいるか、元気か、何をしているのかを確認しようとする。時には疲れて昼寝をしている筆者の部屋の窓を外から叩き開けてなかを覗き込んできたこともあった。

筆者自身も、ラモの姿がしばらくみえずどこにいるのかわからないと、何となく不安になって近所まで探しに出かけていた。たいていは近所の人の家でお茶を飲んでいるか、店番をしていた。ソナムに関しても、朝ソナムがラモ家にこなかった時には不思議に思い、特に用事はないがソナムの部屋まで訪ねて行き、在宅の際には彼女の部屋でお茶を飲んでいくことがしばしばあった。また、老後を心配し節約する彼女にしばしば食料を贈った。筆者が彼らとの関係を良好に保つために気を遣っていたことや労働力を提供したことは数えきれないほどあるが、上記の事柄はそれとは違い、そうせずにはいられなかったのだ。

他方、近所に住む女性たちからは、筆者はラモ家の一員のようにみなされ、筆者がラモを手助けすることは当たり前のよう考えられている。

事例4 手伝わないと批判の対象になる

2011年にラモ家で儀礼を行い、村人に配るための大麦とバターと砂糖を使ったトルマを大きな鍋で作った後、筆者は少し離れた場所からラモがその大きな鍋を洗っているのを眺めていた。すると、隣に住む女性（46歳：2011年時点）に怪訝な表情で、「母親が鍋洗ってるわよ！あなたが洗いなさい！」と叱責された。筆者は慌てて手伝いにいったが、直径1.5メートルの鍋を洗う術も知らず、結局そばでうろたえるだけだった。

近隣住民の女性の表情や発言からは、筆者がラモの仕事を手伝うことはごく当たり前か、むしろ手伝わなくてはいけないかのような義務的なニュアンスが伝わってくる。

事例2、3、4からは、必ずしもバランスがよいとはいえない労働交換や相互扶助関係をみてとれることはもちろんのこと、それ以外に、互いを気にかけて合うような感覚が生まれていることもわかる。またともに住むことで筆者は隣人によってラモと一括りに認識され、家事などを手伝うべき義務を負う存在としてみなされていることもわかる。ここからは、自らの日々の感覚に他人（隣人や居候）が組み込まれたり、隣人によってそのようにみなされたりする様子が伺える。

4 儀礼における隣人同士の関係

次に、日常生活だけでなく嫁盗り婚や死者儀礼といった儀式や儀礼の場面においても、隣人や友人関係が重要な役割を担っていることを示す。

4-1 嫁盗り婚におけるソナムの重要性

この節では、上記でとりあげたソナムが、日々の生活だけでなく、ラモ家で行われた嫁盗り婚においても、それに関する重要な情報を同じ家屋に住む者や居候よりもいち早く伝えられ、場を取り仕切るという重要な役割を担っていたことを示したい。また、正式でない結婚の宴会が隣人と友人の存在や手伝いによって成り立っていたこともあわせて示したい。

なお、現在スピティで嫁盗り婚を行うことはほとんどない。ラモが嫁盗り婚を実行することに決めた理由は、体力の衰えから早く嫁を迎え入れたかったが、息子が乗り気でなく、またラモの異母妹の義理のオジが亡くなってから1年経っておらず正式な結婚式を控えるべき状況だったからである。

事例5 隣人が結婚の宴会で重要な役割を任される

2014年5月21日にラモと夫が息子の嫁を迎え入れるために嫁盗り婚を実行することを決めた時、一番はじめにそのことを知らされたのはソナムだった。当の息子や娘、一緒に住む筆者よりも先に、ソナムはそのことを打ち明けられていたのだ。その日の夕方、両親が頼んだ息子の友人2人が車で近隣の村に嫁を「盗りに」行った。いわゆる嫁盗り婚である。家のなかでは内輪の結婚の宴会の準備が進められた。その時にもラモはソナムに指示を出し、ソナムが準備の際中心的な役割を担っていた。ほかにも、手伝いにきたのはほとんど隣人や友人であり、ニリンと呼べるのは男性1人だけだった。これには、ラモのニリンにあたる人が他界していたことに起因してこの宴会が正式な結婚式という形態をとらなかったことが関係していたと考えられる。翌日、ラモの異母妹をはじめとしたニリンにあたる人たちはラモの息子が妻を娶ったことを知って驚いていた。

4-2 死者儀礼の際の隣人、友人の手伝い

次に、死者儀礼においても、親族だけでなく隣人や友人が多くかけつけ、食事作りや配膳を手伝うことで儀礼の遂行を可能にするほか、取り乱した遺族を落ち着かせたり慰めたりすることで遺族の支えとなっていることを示したい。

事例6 死者儀礼における多様な手助け

2014年11月26日にラモの異母妹タンジンの息子（当時3歳）が食中毒で亡くなった際、多くの隣人や友人がかけつけ、タンジンの自傷行為を止めたり、慰めたり、ともに泣いたり、あるいは食事作りを手伝っていた。筆者が確認できた限りでは、特に

自傷行為を止めるという一番体力を必要とする役割を交代で担ったのは筆者を含め6人、そのうち筆者を除く4人が隣人あるいは友人、1人がニリンにあたる人だった。タンジンの姉でありラモの異母妹にあたるドルマは泣き崩れ、その後放心状態に陥り、タンジンの義母も涙を流し続けた。ラモをはじめとしたニリンにあたる人たちも遺族を慰めていたが、隣人や友人なしでは到底支えきれない状況にあった。

翌日行われた死者儀礼を含めそれ以降3日間は、ニリンのほか、隣人や友人、知り合いがかけつけ大量のミルクティーや食事作り、それらの配膳、片付けなどを手伝っていた。1日に少なくとも100人、多い日には推定200人以上の来客に対応するためにはニリンのみでは対応しきれないからである。

筆者が確認できた限り、2014年11月26日から12月25日のあいだ、タンジンを手伝いにきた人は全員で51人、そのうちニリン23人、筆者が関係を把握しているタンジンの身近な隣人と友人6人、友人や知人7人であり、その他関係が把握できていない人が15人いた。

以上の2つの事例からは、隣人であるソナムは、日々の生活だけでなくラモが嫁盗り婚を決めた時にも重要な役目を担っていたことがわかる。また、死者儀礼においても自傷行為の阻止や食事作りなど、隣人、友人なしでは儀礼の遂行や遺族の支えが困難なほど彼らは重要な位置づけにあったといえる。

021

5 ニリンを超える親密な関係性

この章では、ニリンを超えるような隣人や友人のふるまいが存在することを指摘し、親族との異同について検討したい。

5-1 ニリンを超える隣人のふるまい

第1節では、大金を友人に貸した事例と貴重品を隣人に預けた事例を紹介し、後にはそれには日々の親密な関わりと、宗教的な信仰が関係していることを示す。

事例7 ニリンが断った手助けをする

2015年2月8日昼過ぎ、仕事がなく、テレビをみるにも1週間停電中でみられず、ラモと筆者は部屋で寝転がって話していた。その時、たまたまラモの夫の隣人かつ親友であり、ラモのニリン（異母妹の義理のオジ）でもある男性（53歳：2011年時点）の話になった（図2と図3参照）。

この男性は、2013年に病死するまでインド国民会議派の主要政黨員だった。ラモによれば、5年前、男性は金銭的に困り、姉や義妹、そのほかのニリンなどにお金を貸してくれるよう頼んでまわったが、ついに誰も貸してくれなかった。その話をする際、ラモは嫌そうな表情をして「ニリンといってもそんなものよ」と吐き捨てるよう

に言った。当時、事情を知ったラモの夫は、男性とニリンとしては遠い関係だが、親友だったため、彼のことを不憫に思い 180,000 ルピー（約 36 万円）を彼に貸した⁶。その後、金銭を借りた男性は 2013 年 10 月に B 型肝炎が原因で急死してしまった。現在、彼の妻と、男性の死後に出家した息子 1 人（2015 年夏に還俗）、娘 2 人（2015 年当時、教師になるための訓練受講中）がいるが、返済してもらえる目処は立っていない。ラモは、この話をラモの息子や娘には秘密にするよう筆者に口止めた。

次に、ラモの隣人夫妻をとりあげ、彼らがニリン（妻にとっては実の妹）ではなく、あえて隣人のラモに貴重品の管理を頼んだ事例をとりあげ、それには事例 7 と同じく日々の関わりと宗教的信仰が関係していることを後に示したい。

事例 8 ニリンではなく隣人に貴重品を預ける

2014 年 10 月 25 日、隣人の男性（50 代前半：2014 年時点）と女性（48 歳：2014 年時点）の夫婦の家の仏間から銀製の器など合計 20 万円相当が盗まれた。すぐに僧侶が呼ばれ占い（モギブ）と相談がなされた結果、警察には届け出ないことになった。その理由は、詮索することで犯人を刺激し、返って自らを身の危険にさらす可能性があるため、また近隣住民やニリンに警察の捜査の手が及び、彼らに迷惑をかけてしまいかねないためである。

その後、2 人は都会へ出向くため家を空けなければならなくなった際、近隣に妻の妹（38 歳：2014 年時点）が住んでいるにも関わらず、仏間を含め家のなかにある貴重品（総額約 100 万円以上）をまとめて入れた大きな箱をラモに預けて出かけた。筆者は後日、それを聞いて驚いた。その夫婦は、毎朝夕、仏間で祈りをあげることに关しては彼らの家の近所に住む妻の妹に頼んでいたが、貴重品の管理は隣人に頼んだのである。2015 年 2 月 7 日に隣人の夫婦はラモ宅に貴重品を受け取りにきた。

その経緯については聞くことができなかったが、貴重品を預けたのはラモのことを信頼していたからだと考えられる。ラモ夫妻とその隣人夫妻は頻繁に家を行き来しお茶や食事に誘い合う間柄であるとともに、以下で述べるように夫同士が共通してチベット仏教の教典に関心があるからだと考えられる。

以上、ニリンを超えるような隣人、友人関係の例を概観した。これまで、親密であることをニリンの理解のための重要な側面として捉えてきたが、関係の親密さという観点からみれば、隣人や友人もニリンと同等あるいはそれ以上の関係性を築いているといえる。

⁶ スピティの 30 代の小学校教師の月給が 20,000 ルピー程度であることを考えると、この額がどれほど高額かがわかる。

5-2 宗教的な信仰から築かれる親密な関係性

上述した隣人、友人同士の親族を超えるような関わりには宗教的な信仰の事柄も関わっていると考えられる。

事例7の大金を貸したケースでは、貸し借りした本人同士は友人であるとともに、チベット仏教の経典や巡礼に対して強く興味を抱いているという点で互いに対する親密な感覚をもっていた。大金を借り受けた男性とラモの夫は頻繁に互いの家を訪れ、ラモ家では2人が庭の椅子に腰掛け、教典や宗教的指導者の教えの内容、巡礼地について長い時には4時間以上話していた。

事例8に関しても、日々の近所付き合いで信頼関係が築かれていることのほかに、男性同士が互いにチベット仏教の教典内容や巡礼に強い興味を抱いていることが関連していると考えられる。事例7の隣人男性ほどではないが、隣人の男性がチベット語に長け、教典の内容に精通していることから、ラモたちと隣人とのあいだには、それらに関連づけて互いを尊重しあうような発言がしばしば聞かれたからである。

また、事例7でとりあげた男性が2013年に亡くなった際、ラモの夫は泣いて悲しみ、1ヶ月ほど食欲が無くなり、体重が減少した。ラモの夫と男性は仏教について話し合う仲だったからだとラモは筆者に説明した。確かに、2011年時にはラモの夫は腹が出ておりそれを冗談にできるほどには肥満体型だったが、2014年に会った時には肩周りや脚が明らかに痩せており、身長約168cmで体重54kgという男性の平均的な体格からすると痩せ気味にあたる体型になっていた。

チベット仏教圏であればチベット仏教の言語や知識に長けているのは一般的ではないかと思われるかもしれないが、スピティではチベット仏教が主に信仰されるとはいえ、僧侶以外でチベット語の読み書きや会話ができるものは少なく、教典に関する詳しい知識をもつ者も少ない⁷。そのため、友人同士が互いにチベット語の読み書きと会話に長け、チベット仏教の教典や哲学に詳しいということは、相手によりいっそう強い親密さを感じさせるのだと考えられる。

5-3 親族ニリンと隣人関係の違い

このようにみると、ニリンと近隣の関係にはほとんど違いがないどころか、隣人関係のほうがより親密な関係を築いているようにみえるが、ニリンと隣人との違いは何だろうか。それは主に役割や義務に関する事柄である。

まず考えられるのが儀礼における役割である。結婚式では花嫁の母方オジがもっとも重要とされ、母方オジが花嫁にアシまたはカタと呼ばれる白い布、少なくとも3,000ルピー以上の金銭、そして衣類やショールなどを贈らなければならない。また、長男が1歳を迎える頃に行われる誕生式では、息子の母親の兄弟は、厚めのブレッド7枚、蒸留酒のボトル1本、アシと呼ばれる白い布1枚、羊肉の脚1本あるいは大きなバターの固まりの全て

⁷ スピティで用いられる言語はチベット語の西部方言であるため、中国本土のラサのチベット語や経典のチベット語と異なる部分も多い。

が入れられた大きな皿（デハ）を息子の父親側から受け取らなければならない。このように、特定の儀礼においては隣人や友人にはない明確な役割がある。

また、上述したタンジンの息子の死者儀礼の後、1ヶ月間以上継続的にタンジンの家に通い続けたのはニリンだった。こちらに関しても、困難なことが起こった場合、「ニリンは助け合わなければならない」という言説かつ規範が関わっている。

これら2つは隣人や友人のふるまいと異なる点であり、社会規範が強く影響する事柄だと考えられる。逆にみれば、これらの規範以外では親族と隣人、友人は関わりにおいて大差ないということになる。

5-4 関係性に関わる表現——近隣住民に用いられる名称

これまでラモを中心とした近所付き合いの内容をみてきたが、ここで、ラモが上記の関係性をいかなる呼称で表現するのかについて言及したい。それは、隣人が場合によっては身内として表現されることもあることから、呼称においてもニリンと隣人のあいだの境界線が曖昧であることが見受けられるためである。

ラモは、ソナムをはじめ近隣住民に対し、上述した「ヤト」あるいは「キムツェ」、または「パドシー」の呼称を用いる。パドシーはスピティではプロシーという発音で用いられる。これらの用語は文脈により使い分けられたり重なったりするものである。ラモはソナムに対しては、ヤト、あるいはヒンディー語の「ドースト (*dost*: 友人)」、英語の「best friend (親友)」を用いることが多い。

そのほか、ラモは近隣住民のことを、互いの台所の食物や調味料を気軽に使い合うことを例にもち出し、「カンビジマック」だと話したことが二度ある（2015年1月）。先述の通り、カンパは家屋を指し、カンビジマックは家屋の成員を意味すると考えられ、最小の父系出自集団と同じような意味をもつ。つまり、系譜的な関係を表す用語だといえる。この呼称が用いられたのは、一度はソナムに対して、二度目は近隣住民に対してである。調査中、同じ家屋に住む者や父系のつながりをもつ者以外にカンビジマックという用語が使われたのは、上述した2つの例と、選挙を機に政治的な利益のために団体化したニリンに対して用いられた時のみである。団体化したニリンに関しては、筆者が選挙活動についてインド人民党所属のコントラクターの男性に話を聞いていた際に、彼がガラム・カンビジマック（団体化したニリンの通称）は人数が多いため、選挙の時に有利であると発言をしていた（2011年10月）。実際にカンビジマックが系譜的なつながりをもつ人以外に用いられた事例の少なさをみても、カンビジマックという語は、友人や近隣住民、広い範囲のニリンに慣習的に用いられる用語ではないと考えられる。

6 両義的な関係

しかしながら、上述したような隣人同士の親密な関係は、詳細に検討すると両義的である。親密に付き合いながらも、そのなかで予期せぬ結果やジレンマが同時に生まれる。また、隣人関係は、些細なことをきっかけとして良好になったり、逆に疎遠になったりもす

る不安定な関係である。この章ではこのようなジレンマや関係の揺れ動きを含む、隣人との関わりの両義的な側面をとりあげたい。まず上述したソナムに対して隣人たちが不満を漏らす事例をとりあげ、その後、ラモの隣人たちに対する不満についての事例をとりあげる。

事例9 ソナムに対する隣人たちの不満

2014年12月中旬頃から、以前として高い頻度で会ってはいたものの、ラモはなるべくソナムを避けようとしていた。以前のように筆者が、「今晚はソナムの好物のアルモモ（*aloo mog mog*：じゃがいも餃子）を作るから、ソナムを呼ぶ？」とラモに聞いても、目をそらして「毎日と呼ばなくていいのよ」と断られることがしばしばあった（アルはヒンディー語、モモはチベット語）。

その後、2015年2月1日、ソナムが仕事の休みを利用して実家に帰省しC村を不在にしていた際、ラモの隣人やニリンにあたる人たちが、3月に帰国予定の筆者のためにラモ宅で送別会を開いてくれた。参加者は、隣人2人、友人1人とラモのニリン3人である。その時、ラモが「ソナムはもうC村に帰ってきてるんじゃないの。呼んだら」と言った。筆者はそれを聞いて、「私が呼んでくる」と言って立ち上がろうとすると、「いないほうがいい」とそこにいたほぼ全員が言い出した。そして、その場にいた人々は口々にソナムの不満を言いはじめた。

家屋の一室をソナムに提供している女性（36歳：2015年時点）は、「ソナムはいつも私の部屋でチャイを飲むけれど、彼女の部屋でチャイを出してもらったことは一度もない。何年も一緒〔の家に住んでいる〕なのに彼女にお茶を飲みにおいでと誘われたことがない」と不満を漏らした。また、ある日彼女はソナムと早朝に用事を済ませた後、疲れていたため前日の野菜と米を炒めて食べようとしたところ、ソナムは朝に米を食べるのを嫌がって彼女の部屋から彼女の分のロティ（*roti*：ヒンディー語、チャパティの意）のみを持参し食べ始めたことを、怒りを込めて話した。

また近隣に住む個人店を営む女性（39歳：2015年時点）は、「この前、夕方にソナムをお茶に呼んだら、夕飯まで居座って、終いには一緒に寝たいけど私の夫と一緒にの部屋では寝れないと言い始めて、私の夫は隣の部屋で1人で寝たのよ。それで夫も怒って、二度と夕方にソナムを呼ぶなと夫に怒鳴られちゃった」と話した。

ラモの異母妹ドルマも、ソナムに話した内容は全てほかの誰かに話されることを話題にあげ、よくないことだとソナムを非難した。

後に、はじめにソナムを呼ぶように言い出したラモは、ソナムがC村にいないことを知りながらも話題をふるためにわざとソナムの話を持ち出したことがわかった。隣人たちがソナムの不満を口々に話しはじめた時、ラモは筆者をみて片目をつむってウインクしてみせた。それがどういう意味なのか、はっきりとはわからなかったが、おそらく、普段隣人たちは何も言わないが、実はソナムに対して不満をもっていることを筆者に伝えたかったのではないかと思われる。その場にいた人々は酒が入り、ソナムの件は最終的には笑い話となっていたが、筆者は複雑な気持ちだった。ソナムの

ことを何度も「親友」として言及していたラモは、隣人たちの不満を聞いて一緒に笑ってはいたが、ソナムについては何も言及しなかった。

上記の事例のように大勢のいる場で誰かへの不満が露呈することは滅多にないが、家のなかで隣人の不満を漏らすことはよくある。ラモもしばしば隣人に対する不満を筆者に漏らしていた。

事例 10 ラモの隣人に対する不満

2015 年 2 月 14 日から 16 日までの 3 日間、つづけて近所に住む姉妹（姉 49 歳、妹 39 歳：2015 年時点）が 2 人でラモの家を訪れた。彼女たちは昼前から夕方までラモ家の居間に座り、編み物をしながらラモと雑談していた。ラモとその時ちょうどラモ家に滞在していた嫁の母方オジである僧侶は、ミルクティーやバターティー、さらにはスピティで来客に対する最上級の歓迎を意味するシャモモ（*sha mog mog*：肉餃子）まで作ってもてなしていた。

しかし、3 日目に彼女らが帰った後、ラモは筆者に不満をもらした。「たまにくるならいいけど、毎日きて一日中居座って……仕事もあるのに」と言った。筆者は少し不思議に思い、「なんでシャモモまで作って出したの？」と聞くと、「ビスケットやスナックは食べたくない〔わがままを〕言うからよ」とうんざりしたような表情で答えた。

実は筆者も、彼女たちが 3 日つづけて家に来た時、正直うんざりした。冬には仕事も減り、誰かと話したくなるものだが、同じ家に共住しているわけではない人が家にくると彼らに付きつきりになってしまうため、それにも限度があるようだ。

このように隣人に対し不満を抱くことは多々あるが、上述したどちらの事例でも、当の本人の耳には入らないよう、注意を払って発言されていた。このように、隣人たちは必要な時に助け合い、暇な時間を一緒に過ごし、時には不満を漏らしたり、関係が不安定になりつつも、関わり続ける。

7 考察

都市化が進むにつれ、村落地域で想定されていたような連帯感を高める強い紐帯は喪失されるのか、あるいは維持されたり異なる形で存在するようになるのかという議論 [Wellman 1979] が行われてきた。あるいは都市においては村落とは異なり、弱い紐帯が重要性を帯びてくるとする研究 [Granovetter 1973] も存在する。

本論は、上述の研究で想定されている、村落地域における強い紐帯が連帯を高めるという図式は必ずしもスピティにはあてはまらないこと、実際にはこれまで議論されてきた規範、相互的義務や戦術だけでなく、さらに情動が入り組み、不安定さを伴いながらも隣人関係が築かれていることについて述べてきた。

スピティでは親密さによって規定される親族ニリンが存在し、重要な関係となっているが、地理的状況や歴史的経緯もあいまって隣人関係も人々の日々の生活を成り立たせる重要な関係性のうちの一つとなっている。

まず隣人関係においては、道義性がみてとれる。3-1 でみたように、スピティにおいては、隣人同士のあいだには、お茶や食事を提供し合ったり、モノを贈り合ったり、あるいは必要な時にさまざまな手伝いに呼び合い労働交換を行うなど相互扶助関係が築かれている。そこでは提供してもらった場合には同等程度のお返しがなされるため、ここには道義性がみられる。

また、祝い事があるか、困難な事が起こった場合、親族や隣人、友人はもちろんのこと、多くの村人が祝いにきたり、手助けにかけつける。これは、互いに助け合わなくてはいけないとする言説かつ規範が存在するからである。これらの際にその人を訪れないことは、良好な関係を維持するつもりがない、あるいは敵対関係にあるといったことを暗に示すことになってしまう。事例1からも行事に赴き祝儀を渡すことが重視されていることがわかる。

とはいえ、隣人関係においては必ずしもバランスのとれた相互扶助関係が築かれているわけではない。3-2 のラモとソナムの関係においては、ソナムのラモ家への訪問回数の多さや頻繁な労働力の提供から、彼らの関係がバランスのとれた労働交換や相互扶助の関係ではないことが伺える。ラモがお茶や食事を提供する代わりにソナムが労働力を提供しているのではないかと思うかもしれないが、その提供されるお茶や食事作りもソナムが手伝えるため、果たしてラモの提供するお茶や食事がソナムの水汲みや洗濯などの労働力の提供に釣り合うか否か、疑わしいところである。上述したソナムのラモ家への訪問回数は1ヶ月間のものだが、より長い期間で訪問回数を出すと、アンバランスさがさらに際立つと思われる。つまり、隣人関係に関する規範は必ずしも関係を規定するわけではなく、関係に応じて柔軟に関係性が築かれる。また、楽しみや関心も共有していることから、Atsumi のような隣人と友人の区別はスピティの事例にはあてはまらず、より柔軟な関係が築かれているといえる。

この点、隣人同士の頻繁な関わりを戦術論の視点からみると、Maurice Bloch [1971, 1973] が述べるように、弱いモラルを有する姻戚や非親族などの関係はモラルが弱いがゆえに継続的な利益重視の相互行為によって維持されうると説明することが可能であるようにみえる。

しかし、ソナムの場合、長期的に考えた場合、ラモのほうが年上であるため本人からの手助けは期待できそうになく、娘や息子の世代に期待するにはリスクが大きい。つまり、ソナムとラモの関係は短期と長期の双方からみても、必ずしもバランスのとれたものとは言いがたく、その意味で典型的な労働交換や贈与交換のモデルにはあてはまらないと考えられる。ここからは、Bloch が想定していたような、長期の相互扶助関係のアンバランスさに耐えうるモラルの強い関係と、短期的に利益重視の頻繁な相互行為を行うことでバランスが維持されるモラルの弱い関係という図式はあてはまらないといえる。とはいえ、近所付き合いを円滑なものにするために隣人関係に戦術的な側面が少なからずあることは否

定できない。

この相互扶助関係のアンバランスさを理解するにあたっては、隣人が互いの日々の感覚に組み込まれる側面が関連すると考えられる。言い換えると、情動的なつながりである。ここでの情動とは、日々の共食や会話などの対面的な関わりから生まれる、感情的なつながりのことを指している。

この情動的なつながりは Carsten の関わり合い概念によって理解できると考えられる。実際に、事例 2 や 3 から明らかなように、ラモやソナム、筆者は、関わるなかで互いを気かけ合い、相手の居場所や何をしているのかを頻繁に把握しようとするようになった。またソナムとラモのアンバランスな関係は、ソナムが脚の悪いラモを気遣ったのである。筆者についても、筆者が彼らとの関係を良好に保つために気を遣っていたことは数えきれないほどあるが、ともにいるような感覚は、良好な関係を築くための投資とは異なり、日々の関わりを通して否応無しに彼らとのあいだに生じるようになったものである。

また、事例 4 は、筆者が毎日ラモと同じ家に住み、関わることで近隣住民にラモ家の一員のようにみなされるようになったという日々の感覚と、それゆえにラモを手伝うべきであるとする道義が筆者にも働くようになったと理解できる。

事例 5 や 6 でとりあげた結婚式や死者儀礼においても、隣人たちは食事作りや食器洗いといった労働力の提供やモノの贈与を行うだけでなく、時に取り乱し気絶しかける遺族を止めたり正気に戻らせようとしたり、ともに涙を流しながら寄り添ったりしていた。こうしたふるまいには上述した「助け合うべき」とする道義や規範がみてとれるのはもちろんだが、単に形式的な労働交換や贈与交換の枠に収まるものではないと考える。そこには同時に、助けざるをえなくなるような、日々の関わりを通して情動的な関係性もみてとれる。

隣人に対する親族ニリンを超えるようなふるまいについても、道義や戦術は関わるが、これらのみでは説明がつかないと考えられる。事例 7 では、ニリンが漸るような大金の貸借であったことから、いくら仲がいいとはいえ隣人や友人にそこまでの道義は働かないと考えられる。また、日々関わるなかで Bestor が指摘するような相互の義務関係が育まれていたとしても、今までにこれほどの手助けをしてもらったという話を聞いたことがなく、説明しきれない。さらに、貸借された金額が一般的な公務員の約 6～8 ヶ月分の給料に値する金額であることから、将来の良好な関係を築くための投資としてはリスクが高過ぎる。考えられることとしては、ラモの夫とその友人が情動的な関係を築いていたということがあげられる。

事例 8 も、道義では説明がつかない。相互に築かれた義務関係という視点からも、逆の話を聞いたことがなく、説明が困難である。戦術という視点からみても、良好な関係を築くために、信頼している証として少なくとも総額 100 万円を超える貴重品を預けることはリスクが高く考えにくい。やはりここにも、日々の関わりを通して築かれた情動あるいは信頼関係がみてとれる。

それとともに、上記のニリンを超える隣人や友人のふるまいに関する 2 つの事例には宗

教的な信仰も関わっていた。大金を貸借した本人同士は隣人かつ友人であるとともに、チベット仏教の經典内容と巡礼に強く興味を抱いているという点で、互いに親密な感覚をもっていた。貴重品を預けた隣人男性とラモの夫もチベット仏教の教典に多少なりとも通じているという点で、大金を貸した男性ほどではないにしろ、親密な関係を築いていた。

これまでの人類学の隣人研究における道義と戦術の議論に情動の視点を含めることでみえてくるのは、道義や個人の戦術によるものだけではない、人々のふるまいや関係性である。Bestor の隣人に関する議論においても、戦術的にふるまうなかで相互的な義務が生まれるという時、それは必ずしも自らの利益追求や将来の良好な関係への投資のためだけではなく、相手への感情や情動があつてこそだと考えられる。そうでなければ、相互的な義務によって逆に戦術的なふるまいが制限されてしまいかねないといったジレンマをよく理解できないと考える。例えば、競争相手の息子を自分の店で修行させることは、Bestor のいう相互的義務にあたると考えられるが、これは互いに子どもや弟子の腕をあげるための技術の交換といったメリットのほかに、自らの貴重な技術が盗まれ商売に影響するかもしれないというリスクや、時間的な関係で自分のみが技術を提供することになるかもしれない恐れも孕んでいる。これらのリスクは商売を営む者にとっては死活問題であり、単に道義や戦術の視点からのみ説明することは困難だと考えられる。

このように道義的、戦術的、情動的、また宗教的な信仰も含めて関係する隣人であるが、隣人に対する表現の仕方に関しては、例えばラモがソナムのことを特に「親友」と表現する時、それはこれまでのソナムとの密な関係の反映であるとともに、それまでの関係性が想起されているといえる。同じく、ラモがカンビジマックという語を用いる際も、これまでの関係が想起されていると考えられる。ここでは、Bloch [1971, 1973] が言うような、親族名称の道義的な意味が戦術的に用いられているわけではない。それは、カンビジマックという用語は親しい間柄の人を指す用語として慣習的に用いられているわけではないからである。ラモがカンビジマックの用語を用いる際には、むしろ日々の関わりに依拠して発言していると考えられる。例えば、同じ台所の食べ物を共有している点を想起することによってである。そこには情動的なものも含まれている。

ここからは、Carsten が指摘するように血縁、姻戚関係を有していなくとも、日々の関わりのなかで家族のような関係になりうることがみてとれる。あるいは、Bestor が指摘したような、親族とも友人とも隣人とも判別がつかないような関係性が築かれていることがみてとれ、親族と非親族のあいだの境界線の曖昧さもみてとれる。

以上で述べてきたように、隣人をもてなし、彼らを手助けすることは、スピティの社会規範であるとともに、見方を変えれば良好な関係を築くための投資でもあり、日々の関わりにおける情動的なつながりによるものでもある。これらのうちのどれか一つのみあてはまるわけではない。道義と戦術そして情動が相互に絡み合って隣人同士の関係が成り立っている。

しかしながら、隣人同士の関係性は両義的である。事例 9 からは、普段親しく付き合っている近隣住民同士であれ、些細な問題をきっかけとして関係が不安定になる様子が伺える。ソナムは近隣住民と良好的な関係を築きつつも、お茶に誘わないことや話したことを

他人に言うといった彼女のふるまいによって近隣住民の批判的となっていた。また事例10でもラモは隣人のためにできる限りの接待をしていたが、予想以上に家に滞在されたことから近隣住民への不満をもらしている。ほかにも、ラモの夫が友人に大金を貸した件についても、友人が亡くなったことから返済の目処が立っておらず、ラモは頭を悩ませることになっている。

これらの事例では、受け取る側には逆の立場に立った際に同等の対応をとらざるをえないという圧力がかかるため負担に感じるかもしれない、また大金を貸したはいいが返してもらい目処が立っていない、あるいは歓迎するが実際にはあまりきてほしくないなど、予期せぬ結果やジレンマが生まれていることがわかる。

さらに、事例9と10からは、隣人関係は些細なことをきっかけとして不安定になったり、疎遠になったりもしうる両義的な関係であり、同化と差異化が繊細になされていることもわかった。こうした関係の好転や悪化、あるいは変化する状況に応じて、一度表明された関係性は別の機会には異なる関係性として表現されたり出現しうる。例えば、一度カンビジマックとして表現された近隣住民は、3日間ラモ家に訪れた際には「迷惑な客」として立ち現れていた。とはいえ、上記した背景や状況から、関係が完全に断たれることは少なく、関係の浮き沈みを経験しながら関係自体は維持される。

ここからは、都市社会学において前提とされてきた、農村社会に特有の強い紐帯が連帯感を高めるという図式は、スピティにおいてはあてはまらないといえる。上記の事例からは、むしろ関係が密であるがゆえに、規範や相互的義務を遵守しない際に批判的となり、些細なことでも不満が生まれうるなど、関係が不安定となりうるということが伺えた。すなわち、強い紐帯には親密であるがゆえに不安定にもなりうるという脆弱性が付きまとうのである。

8 おわりに

本論では、スピティにおける隣人関係は、道義や戦術、情動を含みながら、時に些細なことをきっかけとして関係が不安定になるような両義的な関係であり、強い紐帯には脆弱性が伴うことが明らかとなった。なお、本論は、調査時に筆者が主に女性と関わっていたことから、女性を中心とした隣人関係を中心として記述している。そのため、男性を中心とした社会関係に基づく隣人関係の体系が別途存在しうる。また、本論では、隣人が参加しなければならない共同労働や贈与についての詳細な記述や、都市に出稼ぎに出ている人々、あるいはスピティ以外の地域へ婚出した人々との関係がどのようなものであるのかについて十分に論じることができなかった。これらの点は今後の課題としたい。

<参考文献>

- 棚瀬慈郎 2008 『インドヒマラヤのチベット系諸社会における婚姻と家運営——ラホール、スピティ、ラダック、ザンスカールの比較とその変化』博士論文、京都大学。
- 中屋敷千尋 2014 「北インド・チベット系社会における選挙と親族——スピティ溪谷における親族関係ニリンの事例から」『文化人類学』79(3): 241-263。
- 福井勝義編 2000 『近所づきあいの風景——つながりを再考する』、昭和堂。
- Atsumi, Reiko 1979 Tsukiai: Obligatory Personal Relationships of Japanese White-Collar Company Employees. *Human Organization* 38(1): 63-70.
- Aziz, Barbara Nimri 1978 *Tibetan Frontier Families: Reflections of Three Generations from D'ing-ri*. New Delhi : Vikas.
- Barnes, John Arundel 1954 (2006) Class and Committees in a Norwegian Island Parish. *Human Relations* 7: 39-58. (「ノルウェーの一島内教区における階級と委員会」野沢慎司、立山徳子訳、『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』野沢慎司編、勁草書房)
- Befu, Harumi 1968 Gift-Giving in a Modernizing Japan. *Monumenta Nipponica* 23: 445-456.
- Bestor, Theodore C. 1989 *Neighborhood Tokyo*. Stanford, California : Stanford University Press.
- Bestor, Theodore C. 2004 (2007) *Tsukiji: The Fish Market at the Center of the World*. Berkeley and Los Angeles : Univ. of California Press. (『築地』和波雅子、福岡伸一訳、木楽舎)
- Bloch, Maurice 1971 The Moral and Tactical Meaning of Kinship Terms. *Man* (N. S.) 6(1): 79-87.
- Bloch, Maurice 1973 The Long Term and the Short Term: The Economic and Political Significance of the Morality of Kinship. In Jack Goody ed., *The Character of Kinship*, pp.75-87. Cambridge : Cambridge University Press.
- Boissevain, Jeremy 1974 (1986) *Friends of Friends: Networks, Manipulators and Coalitions*. New York : St. Martin's Press. (『友達の友達——ネットワーク、操作者、コアリション』岩上真珠、池岡義孝訳、未来社)
- Carsten, Janet 1997 *The Heat of the Hearth: The Process of Kinship in a Malay Fishing Community*. Oxford : Clarendon Press.
- Carsten, Janet 2004 *After Kinship*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Carsten, Janet, ed. 2000 *Cultures of Relatedness: New Approaches to the Study of Kinship*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Granovetter, Mark S. 1973 (2006) The Strength of Weak Ties. *American Journal of Sociology* 78: 1360-1380. (「弱い紐帯の強さ」大岡栄美訳、『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』野沢慎司編、勁草書房)
- Mitchell, James Clyde ed. 1969 (1983) *Social Networks in Urban Situations: Analyses of Personal Relationships in Central African Towns*. Manchester : Manchester University Press. (『社会的ネットワーク——アフリカにおける都市の人類学』三雲正博、福島 清紀、進本真文訳、国文社)

Punjab Government 2012 (1899) Gazetteer of the Kangra District, Parts II to IV, Kulu, Lahul and Spiti, 1897. Lahore : B. R. Publishing Corporation.

Wellman, Barry 1979 (2006) The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers. *American Journal of Sociology* 84: 1201-1231. (「コミュニティ問題——イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク」野沢慎司、立山徳子訳、『リーディングス ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』野沢慎司編、勁草書房)

インターネット資料

Census of India (2011)

<http://censusindia.gov.in/> 2016 年 9 月 30 日閲覧日。

Neighborhood Relationships The Case of Tibetan Buddhists in Spiti Valley, North India

Chihiro NAKAYASHIKI

Keywords: neighborhood, kinship, relatedness, affect

This paper aims to clarify how neighbors relate to each other in the everyday lives of people in Spiti. Previous studies on social relationships in Tibetan Buddhist societies tend to concentrate on kinship relationships. However, in fact, people interact more within social relations with neighbors rather than with kin. Neighbors in this case are sometimes also close friends or colleagues.

Neighborhood relationships in Spiti are constituted through exchanging labor and goods, eating together, aiding each other, and visiting each other's homes. They frequently interact and help each other in their everyday lives. These relationships sometimes include large imbalances of giving and taking.

Emotional ties between neighbors, constituted through interaction in their daily lives, are connected with this imbalance. I was also included in this kind of tie by my homestay family and their neighbors, and therefore was made to carry out some duties such as helping with their housework.

Neighbors are also important in ceremonies and rituals such as weddings and funerals. They work for neighbors and give some food, supplies, and even mental support. Neighbors sometimes try to behave more intimately than they would with their own kin.

However, neighborhood relationships include ambiguous aspects. They use different attitudes, such as assimilation or differentiation, toward their neighbors depending on small matters. What is more, sometimes an unexpected result or contradiction can occur in relations with neighbors. This paper shows the more complicated issues centered on morality and tactics that also relate to the strength of people's ties and solidarity.